「ちょっと寂しい感じだねえ。とりあえず隣には色々置いておくから後で見ておいて」
「隣？」
「こっちがきみの部屋。隣がきみのお客さんの部屋」
「ああ、そういう事。でもどうして俺に部屋なんか」
他のところは知らないけれど、この妓楼では人気のある数人だけが自分の部屋を持たされていて、後は大部屋で寝起きしている。殆ど客がついていないのにどうして……と不思議に思っていると譲さんが大袈裟に笑って答えた。
「だってきみはもううちでも指折りの売れっ子だからね。部屋もそれなりにしないとお客さんを上げられないでしょう。あの人うるさそうだし」
「はあ？」
「随分響希くんを気にいってるみたいだったからね。祝儀もけちらず気前がいいし、いいお客さん掴まえたねえ」
譲さんはかなり上機嫌だ。客というとやはり大和の事だろうか。だけどそれなら俺が部屋なんてもらうのは間違いだ。きっともう彼はここへは来ないのだから。
「あの、譲さ……」
「彼ね、明け方にもきみを心配してたよ。かなり呑ませちゃったから一日休ませてやってくれって。ああその分お金は貰ったから。ハハハッ」
「大和が？　だって俺、昨夜は……」
口づけの最中に気分が悪くなってしまい、そのまま悪酔いというやつを初めて体験したのだった。散々飲み食いして介抱だけされて、抱きあうどころか彼を喜ばせるような事は何も出来なかった。最初の時以上の失態だ。もう次はないと思う。
いつ大部屋に戻れと言われるかと、数日間やきもきしながら過ごした。
けれどそう言われる事はなく、大和はまたここへ来たのだ。
驚いて目を瞠る俺の後ろで譲さんが笑っていた。大和は譲さんに視線を遣り、それから新しく俺に与えられた部屋を見て、
「お前の値段が五倍になっていたのはこういうわけか」
と面白くもなさそうに言った。
それ以来彼は俺の客になった。
大和が俺のもとを訪れるのは週に一度ぐらいだった。だいたいいつも夕方頃に使いを寄越すから、その日は宴席に出ずに待っている。やって来るのが夜遅くになる事も多くて、そういう時はどこかへ寄ってから来ているのか少し変わった洋装をしていた。重そうな生地をたっぷり使った長い上着の着こなしは軍人のようにも見えたが大和は自分は軍人ではないと言った。では何なのかと

訊ねてみたがはぐらかされるばかりでまだ教えてもらえない。
いつも二人で軽い食事を摂ってから床に入った。大和は時々酒を呑んだが、俺は先日の失敗が気になってもう呑みたいとは言わなかったし、彼も勧めてこなかった。他に人を呼んで宴会をしたがるという事もなく、静かで落ちつくけれど時に気まずい、そんな時間を二人きりで過ごすのが常だった。
俺の身体は少しずつ大和に慣れて、今ではもう交わるのを苦しいとは思わなくなっていた。むしろ最中は強い快楽を感じもする。大和はそんな俺の変化について何も言わなかったが、じっくりとこちらの反応を探るような抱き方をする人だからきっと気づいていただろう。
何しろ俺は大和以外と寝ていないのだ。部屋をもらった時から張見世には出なくていいと言われていた。売れっ子はそういう営業はしないもの、と言われたが俺の場合は売れっ子といっても大和が大金を積んだというだけで客が多いわけではない。人目につく場所へ出なくなれば新しい客が増えるはずがなかった。
鬘をやめ、大和が好まないので廓の他の子達のような厚い化粧もしなくなるとそれまでの派手な着物は全く似合わなくなった。青や緑の落ちついた色合いの地味な物ばかり着ているのは着飾らせられるより落ちつくし楽だが、廓に勤める者としてこれでいいのかと不安になる。
「やっぱり大和のいない日はもうちょっとちゃんとしたほうがいいかな？」
「別にいいんじゃないの？　なかなか清楚なのが逆にそそるとか、そういう路線もありって事で」
「はあ……」
譲さんが俺に部屋を与えたのは大和から俺を身請けしたいという話をされたからしい。要は揚げ代の吊り上げだ。部屋持ちになったのだから五倍払えと吹っかけたらしい。素直に払う大和もどうかと思う。それだけ散財しながら相変わらず何が楽しいのか解らないような顔をしていて、俺もそんな大和にどう愛想を振舞ったらいいのか掴めない。金儲けに一生懸命な譲さんだけが楽しそうだった。
譲さんと呼ばれている人は俺の所属する妓楼の楼主で、まだ若い男性だ。いつも背広にハンチングを被っていて、妓楼には珍しい格好だとからかわれる度に洒落ているだろうと返すちょっと変わった人だった。
本人は女の人が好きらしいのにどうして男ばかりの妓楼なんてものを作ったのか訊いてみたら彼は冗談めかしながら答えてくれた。
「今時女の子を見つけてくるのも大変でしょう。親は娘を売るにしても製糸工場なんかのがまだましだって言う